

平成 26 年度 大学院工芸科学研究科 学位記授与式（秋季）
学長告辞

本日、修士と博士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。

京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝い申し上げます。また、皆さんをこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申し上げたいと思います。

京都工芸繊維大学は、昭和 63 年に大学院を改組し、工芸科学研究科を設置しました。これまでに、8078 名の修士号と 715 名の博士号の学位を授与してまいりました。

本日皆さんには、修士学位 8079 号から 8098 号まで、課程博士第甲第 716 号から甲第 729 号まで、論文博士第乙第 191 号から乙第 194 号までの学位を授与致しました。皆さんの研究業績は本学の知的財産に加えられ、提出していただいた学位論文は広く人々に公開され、それぞれの分野における新たな展開のため、また技術革新や産業創出のために活用されます。さらに皆さんに続く後輩の研究のために利用されます。

学位を取得された皆さんには、今後、それぞれの分野においてその能力を発揮されることを希望しています。そして、特定の専門領域で研究テーマを深く極めることに主眼を置いた研究方法だけでなく、広い視野に立って、他の研究者との共同作業を心がけてください。また自らの研究や仕事が、社会的にどのような役割を持つのか、社会にどのような影響を及ぼすのか、科学者として、技術者として、一人の人間として、社会的責務を果たすことを考えてください。

博士の学位取得は人生の一大イベントであり、自らの人生の方向を定める一大事業であります。博士号を取得した以上、今日の時点では世界のだれよりもその分野に通暁しているのは、あなた自身であります。その意味では、あなたは自分の専門分野において、世界の最高峰に立ったといっても過言ではないでしょう。

一方、日本の社会や企業において、博士号取得者の社会的評価は決して高くないのも事実です。狭い専門分野に閉じこもり、幅広い分野の研究へと展開する力がないといわれてきました。ところが、最近この評価に変化が見られるようになりました。すなわち、現在では修士のレベルでは物足りない。専門知識は、博士号取得者のレベルが要求され、大学における博士号取得の経験は企業

でも有効である。博士号取得者のもっている経験を引き出して役立てるべきであり、博士号を昔のように特別扱いすべきではない。こうした意見をきっかけとして、新たな時代を迎えようとしています。

今日の学位記授与式にあたり、学識経験を広く社会に活用していくためには、皆さん方自身が博士の学位にこだわり過ぎないこと、一度研究主題から自分を解放して、広く研究と人生を見渡してみることが大切でしょう。

いま京都工芸繊維大学は、国立大学の先頭を切って、大学改革を推進しています。来月からは、これまでの改革を加速化させ、産業界や国民の期待に応えるべく、専門技能だけでなく、プロジェクトを成功に導くためのリーダーシップを身につけた人材の育成に乗り出します。多くの人を束ね、リスクを見極め、ときには利害の調整を行い、プロジェクトを成功に導く人物、深い専門性ととともにプロジェクトを成功に導くための能力を兼ね備えた人物、テック・リーダーと呼ぶべき人材の育成に全力で邁進するつもりです。京都工芸繊維大学の卒業・修了生は、その専門性において高く評価されてきましたが、今後はさらに、管理運営能力においても高い評価が得られる人材を輩出していくべきだと考えています。

大学が社会から求められているモノ、それは教育・研究・社会活動の3つあります。特に大学がおこなうべき社会活動とは、「COC」、「COI」、「国際貢献」の3つの明確な内容を意味しています。「COC」とはセンターオブコミュニティのことであり、大学は地域の核となり、地域の活性化に寄与すべしというメッセージです。「COI」はセンターオブイノベーションの略であり、大学には産業振興の核となることが強く求められています。さらに、産業の活性化なくして地域の活性化なし、国際化なくして企業の活性化なしとされているように、国際化をキーワードに本学の活動を展開していきます。特に東南アジア、ヨーロッパ、北米に注力し、国際交流活動の展開を図ります。日本人学生の海外派遣と留学生の受け入れに関しては、規模を拡大し、大学全体の国際化、キャンパス全体の国際化を図り、10年後にはキャンパス全体の風景が一変するような変革を実行していきます。

具体的には、京都工芸繊維大学は、研究者、技術者、教育者、企業人を引き付け、イノベーションの拠点となること、世界中でプロジェクトを成功に導く国際高度技術者、テック・リーダーを輩出するアジアの拠点校となることを目指します

世界から優秀な人を引き付けるには、京都工芸繊維大学自身が魅力的でなけ

ればなりません。世界の現場で・リーダーシップを発揮して・プロジェクトを成功に導く「テック・リーダー」と呼ぶべき人材には、確固たる専門性、リーダーシップ、外国語運用能力、日本人アイデンティティが求められます。この能力を獲得するためには、3×3とよぶ構造改革が有効です。学部定員を減らし、大学院定員を増やすと同時に、学部、修士、博士の区切りを実質的に3年－3年－3年とします。更にクォーター制を組み合わせることにより、海外インターンシップなど海外に出ていきやすい環境を整えます。

同時に研究に関しても、大学にける学問探究の意味が変わって来ています。歴史的に見れば、19世紀あるいは20世紀近代社会における知的活動においては、数式や記号による普遍性を目指した理論的な営みが優勢を占め、大学教育も、理論を重視し、現場のモノづくりを軽視するに至りました。物理学、数学、論理学、さらには抽象絵画や12音階音楽などに共通する特徴は、フォーマリズム、形式化と呼ばれる特徴です。その極端な事例は、数学においてヒルベルトが目指した無矛盾な体系の構築であります。しかし、残念ながらヒルベルトの構想は、ゲーデルの不完全性定理によって打ち砕かれます。このゲーデルの「不完全性定理」、あるいはハイゼンベルクの「不確定性原理」などによって、20世紀近代が目指していた夢、普遍的な知の体系、透明な論理的構築物を建築する構想には、理論的な限界があることが示されたと言えるでしょう。

21世紀の今日においては、大学の教育研究活動の重心は、より実践的で、現実的、経験的な現実の課題の解決に回帰しつつあります。かつては、学者＝知識人と言われた時代から、いまや学者＝技術者という時代になっています。現代における知の活動は、工学的技術を自由に駆使した実践的な成果が求められているのです。特殊性、個別性を突き詰めていくことによって、結果的に巨大な構築物を作り上げる機会が訪れるかもしれない。この意味で、再び技術に大きな期待がよせられる時代がやってきたと言えるでしょう。

実践的技術やモノづくりに関して、避けて通れないのが現場での活動です。コンピュータの導入をきっかけに、モノづくりの現場から身体性が失われてしまいました。しかし、いかに時代が変わろうとも、モノづくりにつきまとう泥臭さや身体性を避けて通るべきではありません。そこに経済合理性を超える感動や職人への敬意が生まれるからです。

実際に、モノづくりの現場では、体力と精神力を総合する人間力が要求されます。モノづくりの現場においても、管理と労働が融合し、労働と遊びの区別がなくなり、労働と休息の区分がなくなりつつある時代です。大学院を卒業した皆さんにも、総合的な人間力が求められ、全人的な労働が要求される時代な

のです。

大学の同窓生諸君は、単純に友情という絆で結ばれています。同じ学寮の出身者は文字通り同僚であり、苦楽を共にした共通体験で結ばれた学友は典型的な友愛の仲間であります。我々は、同じ大学に学んだ同窓生ですが、経済的な利益で結ばれているわけではありません。我々は共通体験と共通の思い出をもつ人間の集まりであり、いわば思い出の共同体の構成員なのです。

母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。修了生の皆さんは、私たち教育者の誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、卒業していただきたいと思います。

そしていつの日か、世界のどこかの街角で、どこかの会議室で、どこかの工場で、再びお会いできる日を楽しみにしています。

平成 26 年 9 月 25 日
京都工芸繊維大学長
古山正雄